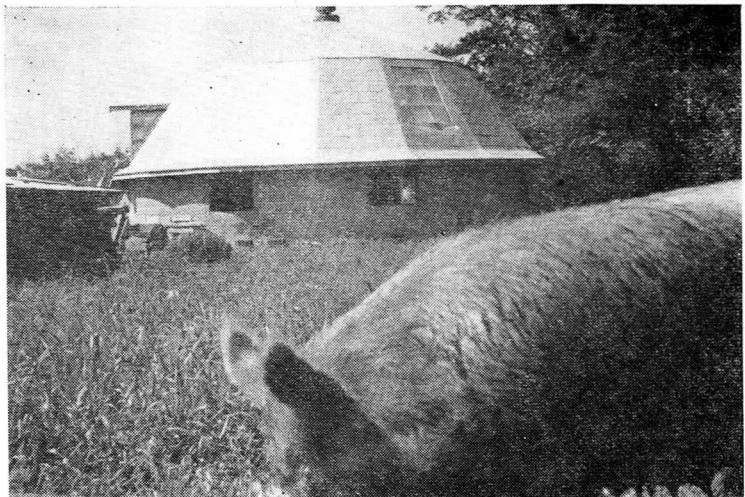


農家 を訪ねて

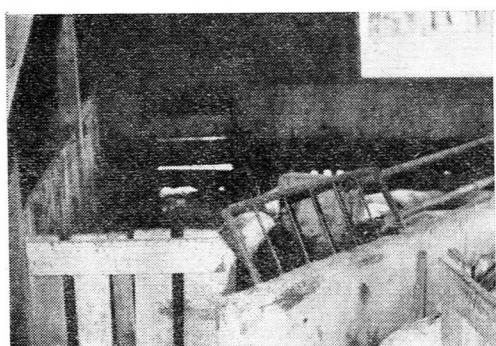


札幌より千歳線で約一時間のところに千歳市がある。千歳市には農業協同組合が三ヵ所あるがその一つ千歳市中央農協に立ち寄り案内を乞うと、営農指導課の木谷さんが現地——根志越地区——まで同行して下さった。

途中木谷さんは「附近一帯は泥炭土質が主であり、土地条件の非常に悪い所で、現在農家数七二〇戸が水田七六九町歩、畑地一、六三〇町歩を作付けしているが、この他に未開の泥炭地一、六〇〇町歩あり、且下酪農経営を推進しようとしてブルドーザーによる開墾、石灰投与など土壤の改良に着工している。農業經營にとつては悪条件の地帯である。」と話しておられた。

水田や、馬鈴薯、家畜ビート等を眺めながら市街より約八キロ北へ進むと、やがて根志越地区に到着し、先ず奇妙な円形の新しい建物が眼に入った。それが村田さんご自慢の円形豚舎であった。村田さんは三十八才位、丁度外で堆肥の積み上げ作業中であったが、仕事の手を休めて養豚經營の生い立ちや現況などを親切に話して下さった。

(トリオ) のようである。



写真は円形豚舎の内部

珍しい円形豚舎

札幌より千歳線で約一時間のところに千歳市がある。千歳市には農業協同組合が三ヵ所あるがその一つ千歳市中央農協に立ち寄り案内を乞うと、営農指導課の木谷さんが現地——根志越地区——まで同行して下さった。

途中木谷さんは「附近一帯は泥炭土質が主であり、土地条件の非常に悪い所で、現在農家数七二〇戸が水田七六九町歩、畑地一、六三〇町歩を作付けしているが、この他に未開の泥炭地一、六〇〇町歩あり、且下酪農経営を推進しようとしてブルドーザーによる開墾、石灰投与など土壤の改良に着工している。農業經營にとつては悪条件の地帯である。」と話しておられた。

木谷さんは養豚に対して深い熱意を持ち、それでは三人協力して養豚研究グループをリーダーとして、飼料の買入れ、仔豚の導入、出荷、肥育豚の出荷など一致協力し研究しながら合理化を図っている。その話を聞いてみると全く頼もしい三人組

養豚をやってみよう

現在の飼養総頭数は約一二〇頭で、その内訳はランドレース×中ヨークのF₁(仔豚販売用、肥育用) 約一一〇頭と繁殖豚(ランドレースの一頭、♀一頭、中ヨークシャー♀九頭) 一一頭を飼育している。

村田さんは五年前まで畑二町歩、水田一町歩の経営であったが、もともと地方の乏しい瘠地であり、中々計画通りの収穫は望めず、多角經營への道へ踏み切る決心をしたのである。そこで鶏を飼い現在四〇〇羽になり、軌道に乗りつつあるが、更に農協に相談して平飼豚舎を建てて豚を導入し、着々実績を上げると同時に養豚にも自信を持ち始めたのである。そして養豚經營を充実させるために折を見ては各地の養豚場を視察し研究熱を高めつつ今日に至っているわけである。

千歳市村田繁夫さんの経営

矢野準二

そしてこの新しい農家養豚經營の意欲が、珍しい円形豚舎の建造となつて現われたものであることがわかった。

円形豚舎は省力的で快適な環境

根志越地区的このトリオは今までの経験と視察研究の知識を生かし、それぞれ經營規模を拡大する為に豚舎を新築することに決まった。

資金面では農業近代化資金を一部利用することが出来た。三人は地積を要せず労働の省力化が出来、しかも豚の成長に快適で寒地向きの豚舎を建てようと計画し、毎日の様に村田さん宅に集り、設計図の作成に取組んだが、対照にする様な豚舎がないので中々決定せず四人の大工さんに相談したがお手上げしたという程、難かしい造りの設計図になってしまったが、あきらめず、農協の営農指導をしておられる木谷さんの元に相談を持ちかけ約五ヵ月間思案した結

果、設計図が出来上がった。木谷さんは「大工さんがお手上げする程の設計図を持込まれた時は、本当に困ってしまったが」と苦笑される。

今年雪解けを待つて四月より全く同じ設計図の基に三人各人が工事に取りかかり、ついに七月に待望の完成を見た。

村田さんは基礎工事はすべて自分でやり、自分の材料も一部使用して施設費の節約に万全を期したという。

その効果が現われ建築費の現金支出は予

算の約半額の三十万円で済んだのである。

円形豚舎の総面積は二十八坪、八豚房に区分されており、一豚房が三坪の面積であり、特徴は①飼育頭数を増すことが出来る。②夏は涼しく、冬は暖い。③通風、換気を良くすることが出来る。④糞は中央の通路に出し容易に運ぶことが出来る。⑤尿は水洗式で尿溜に流される。⑥仕事がし易く労働時間が短縮できるという無駄の少な

この他繁殖豚用にラデノクロバーを六〇匹作付けしており、繁殖豚には出来るだけラデノクロバーを欠かさない様にしている。その結果、肉豚は丈夫な骨格と筋肉がつくられ、繁殖豚は繁殖率が向上し、多産の因をつくっていると力説しておられた。

病気らしい病気も出ないので医薬品、添加物は使用していないが、放牧しているので肺虫や蛔虫を駆除する為、離乳期の他にたびたび駆虫薬を投与するという心構えである。

村田さんは特に繁殖技術が得意であり、現在母豚の健康も考えて繁殖回数は年平均二・三回、平均産仔数十一頭といふ立派な成績で、このベースで母豚を使つて行くと五年間で十二~十三腹は取れる

い豚舎の様である。

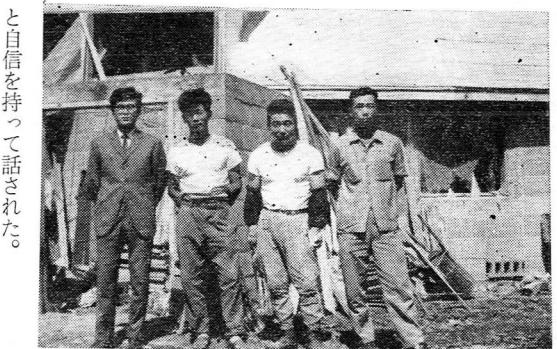
飼養管理の概要

小川が流れているのを利用して繁殖豚は勿論、肉豚も体重五、六十kg位になるまでは緑餌の採食と日光浴を兼ねて放牧させてい

る。

この他繁殖豚用にラデノクロバーを六〇匹作付けしており、繁殖豚には出来るだけラデノクロバーを欠かさない様にしている。その結果、肉豚は丈夫な骨格と筋肉がつくられ、繁殖豚は繁殖率が向上し、多産の因をつくっていると力説しておられた。

病気らしい病気も出ないので医薬品、添加物は使用していないが、放牧しているので肺虫や蛔虫を駆除する為、離乳期の他にたびたび駆虫薬を投与するという心構えである。



写真は右から農協の木谷さん、村田さん、トリオの一人南さん、筆者。

か、赤字となるので肉価の思わしくない時は仔豚中に出荷するという方法を取っています。

収支については「円形豚舎もまだ日が浅いのでここで結論を出す段階には至っていないません。

それよりも円形豚舎の二階に飼料タンクを取付けたり、農業近代化資金を返済することが先決です。」と控え目に語り、更に

「今後の考え方としては肥育と繁殖の二本立てよりもどちらか一本にした方が合理的と考えているので、将来は得意の繁殖専門に

考へているので、将来は得意の繁殖専門に考える考え方があり、また豚、鶏、水田、畑の多角経営はまだまだ続けなければならない

が将来、豚は仔豚を主体に年間五百頭出荷、産卵鶏千羽が実現した時には水田も畑もやめます。」と多角経営から畜産へ一步

一步前進しようとする意欲に燃えながら慎重に着実に計画を話しておられた。

(上野観育種場 分析研究室)

豚に費やす労働時間については「余り勤勉なのでかなり費やしていると苦笑されながら、朝一時間半、昼一時間、夕方一時間半、計約四時間位です。」といわれる。農業従事者は奥さんと一緒にりであるが、主に奥さんは畑と鶏を管理し、村田さんは水田と豚の管理をしている。

養豚経営の収支と将来への道

肉豚は百八十日~百八十五日で九十kgになるが、放牧をしていても飼料費の節約といふ事を考えていないので、飼料費は一般と同じ位かかっている。

「放牧は健康な体をつくるためであつて、肉を付けるには市販の配合飼料を使用すべきだと考えている。」と話された。

肉価がキロ当り三百円以上なら利益も充分期待できるが、それ以下ならトントン

